

ヨハネ14 : 5-31

14:5 トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。14:7 あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」 14:8 ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」 14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。14:11 わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。14:12 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行うわざを行い、またそれよりもさらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。14:14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。14:15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。14:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。14:19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。14:20 その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。」 14:22 イスカリオテでないユダがイエスに言った。「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」 14:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。14:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。14:25 このことをわたしは、あなたがたといっしょにいる間に、あなたがたに話しました。14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。14:27 わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。14:28 『わたしは去って行き、また、あなたがたのところに来る』とわたしが言ったのを、あなたがたは聞きました。あなたがたは、もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを喜ぶはずで、父はわたしよりも偉大な方だからです。14:29 そして今わたしは、そのことの起こる前にあなたがたに話しました。それが起こったときに、あなたがたが信じるためです。14:30 わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。14:31 しかしそのことは、わたしが父を愛しており、父の命じられたとおりに行っていることを世が知るためです。立ちなさい。さあ、ここから行くのです。

導入

先週、イエスによる弟子たちへの教えについて学び始めました。イエスは、ご自身がおられなくなる時に備えて弟子たちをお教えになりました。イエスは、弟子たちがすぐにはついて来られない場所に行くとおっしゃいました。それで、イエスがおられなくなっても神のみことばに忠実にあるよう弟子たちを励まそうとなさいました。また、イエスはその生き方によって神に栄光をもたらされたように、弟子たちにも生き方によって神に栄光をもたらしてほしいと望まれました。

イエスは自らのちをささげ、世の罪に対する罰を負って十字架で死ぬことで、神の栄光をあらわそうとしておられました。イエスが弟子たちを愛されたのと同じ愛で弟子たちが互いに愛し合い、それによって弟子たちが神の栄光をあらわすことをイエスは望まれました。

ヨハネ13：34-35

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。 **13:35** もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

先週、聖書のみことばに従うことで私たちも神に栄光をもたらすことができると学びました。聖書に従い、「福音のメッセージ」を告げ知らせることが何よりも神の栄光をあらわすことです。

また、サタンあるいは悪魔と呼ばれる敵がいることも学びました。サタンは、神の栄光を自分のものにしたいと願いますが、それはかないません。それで、人間が聖書に背いて勝手な生き方をしよう仕向け、サタンに従わせようとしています。甘い言葉で私たちを誘いますが、その内容が実現することはありません。

自分の思うままに進んでも、結局は失望するだけです。神を信じる人々に神がなさる約束と同じものをサタンが与えることはできません。

イエスは、弟子たちのために天国に場所を備えに行かれると先週のみことばにありました。

先週のみことばで唯一がっかりさせられる内容は、翌朝にわとりが鳴くまでに弟子のひとりペテロがイエスを知らないと言おうというイエスの預言でした。

ペテロは、本物の弟子に与えられる課題と向き合える状態ではありませんでした。まだ神の聖霊に満たされておらず、働きのために力をいただいていたからです。

ペテロは自分の言ったとおりにできませんが、神はその失敗を用いてくださいます。聖霊をとおして与えられる神の力を信じ切るなら、すばらしいわざが成せることを、この失敗をとおして教えてください。

「二階の広間」で繰り広げられたイエスと弟子たちの会話を今朝も続けて学んでいきます。

今朝は、14：5にあるトマスの質問とイエスの返答について、そして14：8にあるピリポの願いについて学びます。

トマスへのイエスの返答はとても短いものですが、非常に重要な内容です。

これに対し、ピリポにはずいぶん長い返答をしておられます。この内容をしっかり学ぶ必要があるのです、この部分に重点を置くことになります。

ではまず、14：5-7を見てみましょう。

1. どのようにして道を知ることができるのか。 (5-7節)

イエスは、ご自身がなくなることについて問いかけるペテロにすでにお答えになりました。いなくなられるのは父の家に弟子たちのための場所を備えに行くためだと、弟子たちにおっしゃいました。

トマスの質問の内容から、イエスがどこに行かれるかをトマスが理解していないことがわかります。トマスはイエスについて行きたいと思っているので、イエスについていく道を知りたいと願いました。

イエスは、トマスの問いに対し、こうお答えになりました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

このトマスへの答えは、短いものですが、キリスト教神学において非常に重要な内容です。

イエスの返答には3つの要素があります。

a) まず、イエスが神への唯一の道であると、イエスはトマスにおっしゃいます。

イエスは、単に道の方向を教えることはなさいません。ご自身が道なのです。キリスト教の信仰は当初、「道」と呼ばれることがありました。(使徒9:2、19:9、23)

こうおっしゃったのは、イエスをとおして以外に神への道はないことを弟子たちにはっきりと教えるためでした。善い行いや宗教、儀式を行うことで天国に行けるという発想は、この言葉によって打ち砕かれます。

天国への道はただひとつ、イエス・キリストです。

これまでのヨハネの福音書の学びを振り返ると、とても興味深いことがあります。イエスはここで、ご自身の教えを簡潔にまとめておられます。

ヨハネ1:51を振り返ってみましょう。

ヨハネ 1:51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

天が開けるのは、人の子が上げられることによって実現します。

ここで、ヨハネ3:14を見てみましょう。

ヨハネ3:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。

イエスは後に、ご自身のいのちである肉を私たちのためにささげるとおっしゃいます。

では、ヨハネ6:51を見てみましょう。

ヨハ 6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

12:32は、天国に後にはついてくるとペテロにおっしゃった言葉を予見する内容です。

弟子たちは、ヨハネの福音書の最初からずっと、このときのために備えられていました。そして今、イエスはそのすべてを一文にまとめられたのです。

イエスは常に私たちのことを備えておられます。それは、私たちのためにイエスが備えておられることのためです。人生は旅路です。その道中、イエスのご自身について常に教え、私たちを備えてくださいます。それは、この世の働きのためだけでなく、後に行く天国のためでもあります。

私たちが知るべき大切なことは、イエスこそ唯一の道であることです。

ですから、イエス以外の人や物事を頼りにしているなら、人生の旅路は失望に終わるでしょう。そこに待っているのは、死であり、地獄での永遠の罰です。

b) 次に、イエスはご自身が唯一の真理であると教えてください。

ヨハネの福音書の冒頭に、イエス・キリストをとおして「真理」が実現したとあります。

ヨハネ1：17

1:17 というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

ヨハネ7：16と12：49は、イエスが「真理」だと語ります。イエスのことばが父のことばだからです。

イエスが私たちに教えてくださることは、神の教えてくださることであり、そこに違いはありません。

イエスは、この世に対する神の救いのご計画についての「真理」です。

ヨハネ3：16

3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

c) 次に、イエスのうちに「いのち」があるとおっしゃいます。

ヨハネ11：25-26

11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。 11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」

ヨハネ10：15

10:15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。

ヨハネ10：28

10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

イエスは、永遠のいのちの話をしておられます。ですから、「わたしはいのちです」とおっしゃったのは、永遠のいのちについてです。イエス・キリストによって神と直接つながることです。

イエスとつながることなしに、神のみもとに来て天国に行くことはできません。

イエスを通してでなければ、誰も御父のところに行くことはできません。

イエスとともに天国で過ごせると確信しても、それは弟子たちの心を落ち着かせるのに役立つでしょうか。

ムーディ聖書学院の学院長だったジェームズ・グレイ師は、次のような賛美の歌を書きました。「旅路が家路ならそれをいとう者はいない」

この世の人生を終えたときに天の家に行けるという確信があれば、困難や戦いに遭遇しても耐えさせてくれます。

この確信は、イエスをも励ましました。

ヘブル12：2

12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

パウロはこの真理を念頭に、ローマ8：18を記しました。

ローマ 8:18 今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

イエスを自らの救い主として受け入れ愛するなら、素晴らしい未来があなたを待っています。ですから、神に与えられたことが何であれ、ひたすらまっすぐに進みましょう。

夏休み中、ご家族ご友人を訪ねてアメリカに帰られた方がたくさんいますが、家に帰れるのですから時差ボケもそれほど苦痛ではなかったでしょう。天国が私たちの故郷で旅の終着地なら、この世での問題は大きく気にならないでしょう。

2. 次に、父を見せてくださいとピリポがイエスにお願いしました。(8節)

7節にあるイエスの言葉に対して、ピリポがこう問いかけたようです。

イエスと神は同一であるから、イエスを見たなら神を見たのと同じだと弟子たちにおっしゃいました。

ピリポは、イエスの言葉に納得しませんでした。そこで、神を目に見える形で見せてくださいと頼みました。天国やイエスの行かれる場所について確信を得るためです。

ピリポは、「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」(8節)と言いました。

ピリポがイエスに何をほしかったのかはわかりませんが、イエスの答えは非常に意味深いものです。

イエスの答えをいくつかに分けてお話していきましょう。

- a) 9-11節—3年もいっしょにいて、イエスの奇跡を目撃し、教を聞いたのではないかと、イエスはピリポをお叱りになります。その3年間、イエスはずっと、ご自身が人の姿をとった神であることをピリポに教えようとなさっていました。イエスは、ご自身が父にあり、父がイエスにあられるとおっしゃいました。

つまり、わたしとわたしのことばに信仰を持ちなさいとイエスはピリポにおっしゃったのです。「あなたが見る証拠は唯一わたしです。それで十分ではありませんか」とイエスはピリポにおっしゃっているわけです。

- b) 12-14節—この個所は、ここ35年ほど間違った解釈をされてきた個所です。誤った解釈と適用が、クリスチャンの間に間違った期待と失望を生みました。

この個所を間違っただけでなく、イエスの起こされた奇跡と同じことを信徒ができるという期待を生みました。さらに、イエスが父のところに行かれたら、私たちがイエスより大きな奇跡をなすことができると誤解されました。

それはおかしいですし、そこには誤りがあります。

まず、日本語の聖書で「わざ」と訳されたギリシャ語の単語「エルガ」は、働きという意味ですが、ある英語の聖書では「奇跡」と訳されています。これは誤りです。

次に、ヨハネの福音書における「さらに大きなわざ」の文脈に目を向ける必要があります。

聖書の内容はすべて、著者の意図した文脈を視野に入れて読まなければなりません。

ヨハネ5：20を読みましょう。

ヨハネ 5:20 それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです。

この後イエスは、大きなわざが何かを説明なさいます。それは、いのちを与えること（21節）と裁き（22節）です。23節は、すべての人が御子を敬うためにこれがなされると語ります。

では、6：28を読みましょう。

ヨハネ6:28 すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」

この問いに対する答えは29節に登場します。それは、イエスを信じることです。同じギリシヤ語の単語「エルガ」が28節で使われています。

では次に、9：3と9：39を読みましょう。

ヨハネ9:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。

ヨハネ9:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」

ヨハネの福音書におけるイエスの働きは、救いと裁きです。

ですから、14：12にある「さらに大きなわざ」は、目に見えるしるしを指しているのではなく、御父の働きを成就する御父のみことばを告げ知らせることです。（10節 b）

福音を告げ知らせることが、「救い」と「裁き」に至ります。（9：3、39）

福音が語られると、反応は二手に分かれます。信じて救いを受けると、福音を拒んで最終的には裁きを受ける人です。

イエスを信じる信仰を持つ人は、福音のメッセージを信じ、さらに大きなわざを行います。

ヨハネをとおして、さらに大きなわざが救いと裁きを意味することが分かりましたが、これはどのようにして実現するのでしょうか。

まず、世界中の多くのクリスチャンが日々福音を伝えています。そして、多くの人が救いを得ています。イエスがこの世におられたときは、同時にひとつの場所にしかおられませんでした。聖霊は世界中で働き、信じる人々を救っておられます。

次に、13-14節は、私たちの祈りをとおして神が栄光をお受けになると約束します。イエスの名に栄光をもたらす内容を私たちがイエスの名によって祈るなら、神はそのような祈りに応えてくださいます。私たちの祈ることが何でも神に栄光をもたらすわけではありません。神がそれぞれの信徒にどのような目的を持っておられるか私たちは知らないからです。

ですから、イエスに栄光をもたらすことに基づいて、神は祈りや願いに答えるかどうかをお決めになります。

ジョニー・エレクソン・タダの例

1967年7月30日、十代のクリスチャンが飛び込み事故で四肢麻痺（首から下がすべて麻痺状態）となりました。

彼女は2年間リハビリを続けましたが、その間は憂うつの中で怒りを感じ、自分の信仰についても疑いを持ちました。しかし、口で絵筆をくわえて絵を描くことを覚え、その絵画が評判になりました。

今では、40冊以上の著書があり、音楽アルバムもいくつか収録しました。自伝映画にも本人として主演しました。1982年にはケン氏と結婚し、世界中で講演をしています。彼女の証と人生は、多くの障害者を勇気づけ、キリストを信じる信仰へとたくさんの人々を導きました。

彼女が障害を負った当初、多くの人々が体の癒しを祈ったことでしょう。しかし、そうはなりませんでした。神は、ジョニーの障害を用いて世界中の多くの人々に働きかけるというご計画をお持ちでした。

9年ほど前、ジョニーの人生について子供向けの学びシリーズを教会で教えました。その学びがきっかけで、ある少年がクリスチャンになりました。今では彼ははりっぱな青年ですが、今も神との歩みを続けています。ジョニーの人生の話が、尊いたましいの救いを生んだのです。

イエスの名によって何でも願い求めることができますが、その祈りにどう答えるかは神のご自由です。神の御名に栄光をもたらす祈りに神は答えてくださいます。

複雑に絡み合う人生の出来事は、天国に行くまですべてを理解することはできません。

しかし、天国に着いたらそれは問題ではなくなります。天国があまりにもすばらしい場所だからです。

c) 15-18節—聖霊の約束

15-18節で、イエスはピリポに聖霊について説明なさいます。イエスは聖霊にふたつの呼び名を与えておられます。「もうひとりの助け主」と「真理の御霊」です。

助け主、またはある英語の聖書では慰め主と訳されたギリシャ語の単語は、「手伝うために横に呼ばれた」という意味です。

聖霊は、私たちのような者であっても、私たちに代わって、働いてくださいます。その働きは私たちの内側になされ、私たちをとおしてもなされます。慰めを意味する英語の単語「コンフォート」は、「力をもって」を意味するふたつのラテン語の単語が語源です。

慰めというと、優しくなだめるというイメージがあります。

赤ちゃんや幼い子どもは、やわらかいおもちゃや毛布があると安心します。これもある程度はそのとおりで、聖霊は私たちを慰めてくださいます。

しかし、聖霊による慰めは、積極的に人生に向き合い、困難なときもあきらめない強さを与えてくれます。

聖霊を「励まし主」と訳す聖書もあります。または、「弁護者」とも訳されます。弁護者とは、法廷で私たちの横に立ち、私たちの言い分を代弁してくれる人です。

(これは、ヨハネ第一2:1の訳としてあてはまります。)

イエスは、聖霊を真理の御霊とも呼ばれます。聖霊は神のみことばに靈感を与えたお方です。また、神のみことばを照らし、私たちが理解できるようにしてくださいます。

聖霊は嘘をつくことができません。嘘と関わることもできません。神のみことばに反することをしよう私たちに導くことは決してありません。

私たちはすべてをまず神のみことばに照らして見る必要があります。神のみことばが許さないことをしよう神が私たちに語られることはありません。

例話

スコットランドのエジンバラで聖書学校に通っていたころ、その学校にはある規則がありました。それは、昼休みに買い物をして外出してはいけないというものでした。昼休みは校内にいなければなりませんでした。

ある日、校長が自宅に物を取りに帰ろうと車を運転していると、聖書学校の生徒が商店街に向かって歩いていました。校長は車の窓を開けて生徒を呼び、昼休みの外出は禁止されていると注意しました。

すると生徒は、「先生、大丈夫です。祈って、聖霊から商店街に行ってもよいと言われましたから」と答えました。校長は生徒に言いました。「そうですか。商店街は今日午後からお休みだと聖霊は教えてくださらなかったのですね。それは残念です。車に乗りなさい。学校まで乗せて行ってあげましょう。」

聖霊は真理の御霊ですから、間違えることはありません。ですから、私たちは聖霊の声をしっかりと聞かなければなりません。

人生に聖霊の働きを求めるなら、イエス・キリストに栄光をもたらすことを求めなければなりません。また、言葉においても行動においても神のみことばを引き立てようとするべきです。

聖霊に満たされるとは、神のみことばに支配されていることです。

真理の聖霊は、真理のみことばである聖書を用いて、私たちをみこころと神の働きへと導いてくださいます。

聖霊は、信徒といつまでもともに住まわれると聖書は教えます。（16節）

聖霊は、御子の祈りに答えて与えられた御父からの賜物です。

イエスは公生涯を送られた期間、弟子たちを導き、守られました。

しかし、イエスが彼らを離れるときが近づきました。聖霊がイエスの代わりとなられるのです。

聖霊は、イエスと別物のお方ではありません。このみことばに「もうひとりの」とありますが、それは「同類の」という意味です。そうです、弟子たちはイエスとお別れしなければなりません、代わりに来られるお方もまったく同じお方なのです。

私たちもイエスを信じるなら同じです。人間としてのイエスは横におられません、聖霊なる神が心に住んでくださいます。

19-24節—聖霊の約束から、聖霊の臨在に話が進みます。

19節には、この世は聖霊を受けることができないとあります。聖霊はイエスを信じる者のみに与えられます。

20節で、弟子たちに起こることがその日になればわかる、とイエスが弟子たちにおっしゃいます。これは、ペンテコステの日のことを指しておられます。

21-24節で、神のみことばに従えば、聖霊を表すことになると、イエスは教えておられます。

14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。」

14:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。

ウォーレン・ウィーズブは、注解書でこの箇所を説明し、こう記しました。

「罪人がキリストを信じると、その人は生まれ変わり、聖霊がすぐさまその人の体に入ります。その人が神の子となった証をします。聖霊はその人のうちに住まれ、離れることはありません。しかし、その信徒が父にゆだね、みことばを愛し、祈って従うなら、父、御子、聖霊との関係を深めることができます。」

つまり、救いは私たちが天国に行けることを意味しますが、神への従順は、天国が私たちのもとにやってくることを意味します。

25-31節—イエスは、聖霊がイエスの平安を与えてくださると教えます。

シャロームは、ヘブル語で「平安」という意味の単語です。これは、ユダヤ人にとってとても大切な言葉です。ただ単に戦争や苦痛がないという意味ではありません。

シャロームとは、何も欠けたものがなく、健康、安全、繁栄において最高の状態を表します。神の「平安」を享受していると、心から「喜び」と「充足感」を感じます。

ここで大切なのは、神の平安がこの世の与える平安とは違うという点です。

この世の平安は個々の資産や力量が土台となりますが、神の平安は関係性に基づくものです。神と正しい関係にあることで、神との平和をいただくことができます。

この世は人の才能を頼みとし、クリスチャンはイエス・キリストのみを頼みとします。

この世では、平安とは願うもの、または手に入れようと努力するものです。一方、クリスチャンにとって平安は、信仰によって受ける素晴らしい賜物です。

クリスチャンは、試練や問題のあるときでも平安を感じられます。それは、神の聖霊のご臨在と力のおかげです。

主イエスを救い主として受け入れていない方も、神との平安を今日いただくことができます。そのために、私たちは何をしなければならいでしょう。答えは「何もしなくてよい」です。イエスはすでに私たちのために御業をなしてくださいました。私たちはただ、神の赦しを認識し、悔い改め、受け取るだけでよいのです。

認識する—この世に罪をもって生まれてきたこと、そして、それが原因で神と引き離されていることを認識する必要があります。

悔い改める—罪に背を向け、自分のいのちをささげてイエスについていこうと心に決めましょう。

受け取る—イエスに赦してくださいとお願いし、神の愛を心に受け入れなければなりません。イエスは今ここにおられます。イエスは、あなたの心の扉を叩いておられます。けれども、扉を開けるハンドルは内側にしかありません。あなた自身がその扉を開いてイエスをお迎えしなければなりません。さあ、今日そうしませんか。

アーメン。